

駒場を
あとに

ビバリベラル・アーツ

山本 泰



银杏並木でユータスくん
(波多野彩撮影)

山本 泰

私が駒場に助教として赴任したのは、一九八二年。それから三四年。ずいぶん長のお世話になった。浦島太郎のセリフが浮かぶ。この大学には一九七〇年に入学し、文学部社会学科を卒業し、大学院に進み、新聞研究所(当時)で助手をして駒場に来たので、入学から数えて四十六年。本当に長かった。こういう次第で私はずっと東大しか知らなかった。「絶滅危惧種」と言われることもある。

九〇年代に入ってから、当時の文部省によって大学設置基準の大綱化が行われ、教養学部の試験の時代が始まった。九五年頃に大学院重点化があり、その混乱は二〇〇四年の国立大学法人化まで続いた。それに加えて、九〇年代後半には駒場寮廃寮という大問題を教養学部は抱えていた。

こういう時代だったから、次から次へと大学の大事な事に関わる事になった。そういう事情もあり、退屈している余裕はなかった。

たしかに駒場はよい場所だと思ふ。来客の多くには、広々として緑が素晴らしいと

か、古い建物と新しい建物の調和が美しいとか誉めていた。だんごもおいしい。でも、それだけではないだろう。この地にはもっと本質的な、人を自由にする空気があるのだと思ふ。そう、「教養教育」。

「教養」という言葉が死語になったと言われて久しい。言葉は古くなってもよいのである。

中世西欧には自由七学科というものがあつた。文法学、修辭学、論理学、算術、幾何、天文学、音楽であったことはよく知られている。これらの学問は役に立たない学問であり、役に立つことを学ぶのは奴隷だとされていた。役に立たない学問を学ぶのは自由人だからであり、そういう人たちのステータスシンボルだったと言つてよい。

が、啓蒙の思想が広まり、例えば、一七世紀のフランシス・ベーコンの「四つのイデオロギ」では、ひとは誤解や先入観、あるいは偏見にいつもまみれていて、そこから自由になる必要があるとされた。

こうなるや、自由七学科も意味が変つてくる。自由な人がする学問ではなく、自由

になるためにする学問なのだ。「知は力なり」。

人を自由でなくしているものは、重力かもしれないし、病気かもしれないし、昔ながらの無知や弱さかもしれない。世界は、狭い世間に生きている私たちよりもいつも広い。

しかもこの学問は自分を自由にするだけではない。自分もふくめて人を自由にするのである。だからこの学問は自分ひとりやるものではない。あくまで共同の作業としてやつてこそ意味がある。

私が大学に入学したころはいわゆる「大学紛争」が終つた直後で、誰も学問の意味を問わなかった。私もずいぶん悩んだものだ。多くの友人たちと悩みをぶつければ、また先生方の様々な考え、スタンスに触れて、多くのことを学んだ。

そう、リベラル・アーツ。これこそ私が探して求めたものだと思ふ。そして、この学問は自由であるからこゝろであつて、それによって私たちが多くのことを学び、その都度成長したのだと思ふ。

やはり、職員や同僚のことも言わないといけない。

駒場の職員は意識が高へ、仕事に一家言をもっている。で、文部科学省のいろいろなGPOPプログラムで、ハーバード大学などを一緒に訪ねても、とても多くのことを吸収してくれたと思ふ。同僚に恵まれたことは言うまでもなく、部会や専攻を問わず、多くの方々に親しく接してもらいたくさんの刺激を受けた。

私が退屈もせず飽きもせず、このキャンパスで三四年を有意義に過ごせたのは、この「学問」のおかげだ。だから、ビバリベラル・アーツ。

九一年の大学設置基準大綱化の後、各地の大学で教養部廃止が相次ぎ、教養学部を維持している東大には無言のプレッシャーとなつて重くのしかかっていた。なぜなら東大

を友達と思つているのではないかと?」と思つておすらあるほどだ。しかし、教室では真剣勝負そのもの。数年前には授業中に学生に手をあげられ、それまで何年も教えていた論理の間違いを指摘されたこともあった(汗)。その時に助けてくれたのはTAとしてそこにいてくれた大学院生たちだ。

このことは、社会調査でフィールドワークに出かけた時と同じで、地域の課題や謎に直面している限り、誰が先生で誰が学生かなんてことは関係ない。

大学院生と熱心に議論をした。博士論文の指導では教員は学生から多くのことを教えられるのが常だ。夜遅くまで延々と議論を交わしたことも懐かしい。

こうして、おすらすべて学問が自由であるからこゝろであつて、それによって私たちが多くのことを学び、その都度成長したのだと思ふ。

やはり、職員や同僚のことも言わないといけない。

駒場の職員は意識が高へ、仕事に一家言をもっている。で、文部科学省のいろいろなGPOPプログラムで、ハーバード大学などを一緒に訪ねても、とても多くのことを吸収してくれたと思ふ。同僚に恵まれたことは言うまでもなく、部会や専攻を問わず、多くの方々に親しく接してもらいたくさんの刺激を受けた。

私が退屈もせず飽きもせず、このキャンパスで三四年を有意義に過ごせたのは、この「学問」のおかげだ。だから、ビバリベラル・アーツ。

九一年の大学設置基準大綱化の後、各地の大学で教養部廃止が相次ぎ、教養学部を維持している東大には無言のプレッシャーとなつて重くのしかかっていた。なぜなら東大

の態勢は圧倒的にマイノリティであり、こちらの側に「なぜ教養学部がないといけないのか」を説明する学証責任があることになったからだ。

でもそれから時代は一廻りしたようで、このころ各地の大学で、教養学部の設置が進んでいる。これはとても喜ばしいことだ。

これまで私たちがやっていたことは間違つていなかった!

学生諸君、教職員のみなさん、自信を持って前に進んでください。ありがとうございます。

(国際社会/社会)

第二点。このような大著を評するにあたって著者は、近代(ここで評者は、自己を批判し乗り越える運動としてそれを広く理解したが、著者曰く「オペラの最後を、ジョン・アダムスの『中国のニクソン』で終えている。また、他の作曲家と比較して、長い真が割かれていられるが、ルイジ・ノーノとルチャード・ベリオというのも意味深だ。二〇世紀におけるオペラと政治/物語という膨大なテーマの磁場は、も強力なのだが、本書の最大の魅力は、そうした磁場の圏域に縛られることなく、何度か「死」の宣告を内外から受けてつても、自己蘇生していくオペラの生命力が描き出されている点である。その意味で本書の白眉は、第五部「オペラはこゝへ?」と言つてよい。最後に一つ、評者なりの悩みを、作曲家であり評論家でもあった諸井誠は「交響曲名曲名盤一〇〇」(音楽之友社一九七九)の中で、「交響曲は生と愛を謳歌する」(メシアンの「トゥーランガリー」)と、死につかれた「シヨスタコフウィチ」(「死者の歌」)の間に引かれたデッドラインの上で、その命脈を絶つた(二一三頁)と、喝破した。交響曲を書き続けている作曲家は数多くいるなかで、である。となつて、同じことが構造的にオペラに何故言えないのだろうか、オペラには著者の

「と憎まれ口を叩くに決まつている。」

そんな予測がすべつとくは、長いつきあひだ。教養の二年生の冬学期(今はA学期)からだから、かれこれ三十年以上。教養学部のなかでも、記録保持者級かもしれない。

おかげで、何を言えども返つてくるか、大体わかつてしまふ。まるで長年の漫才コンビのほけとつこみである。泰先生のムチャ振りの最大の被害者はたぶん私で、私のプチギレの最大の被害者

「困ったこともある。口頭試問などで泰先生がコメントする」と、学生が何を言われたのか理解できずに、きょとんとしたりする。すると、泰先生は私の方を向いて、「俺、変なこと言つてないよね?」という顔をするのである。

いやいやいやいや。わかるように話すべきなのか、わかる程度には修行すべきなのか。どうもせよ、少なくとも私の責任ではないはずだ。でも、長いつきあひは、そんな常識を許してられないのである。しかたがないので、かみ砕いて解説させられるのだが、これって一種のただ働きじゃないだろうか……。

まあ、おかげで退屈はせずです。でも、おすらと社会学者としての専門も流儀もちがい、「先生はどなたですか」ときかれて答えるのが嫌かたります。結局、この辺があまりに魅力的で、先生にしたのだから、これも自己責任なのだろう。

というわけで、泰先生、長い間ありがとうございました。楽しかったです。

(国際社会/経済)

送る言葉

山本泰先生を送る

These Happy Golden Years

佐藤俊樹

「と憎まれ口を叩くに決まつている。」

そんな予測がすべつとくは、長いつきあひだ。教養の二年生の冬学期(今はA学期)からだから、かれこれ三十年以上。教養学部のなかでも、記録保持者級かもしれない。

おかげで、何を言えども返つてくるか、大体わかつてしまふ。まるで長年の漫才コンビのほけとつこみである。泰先生のムチャ振りの最大の被害者はたぶん私で、私のプチギレの最大の被害者

「困ったこともある。口頭試問などで泰先生がコメントする」と、学生が何を言われたのか理解できずに、きょとんとしたりする。すると、泰先生は私の方を向いて、「俺、変なこと言つてないよね?」という顔をするのである。

いやいやいやいや。わかるように話すべきなのか、わかる程度には修行すべきなのか。どうもせよ、少なくとも私の責任ではないはずだ。でも、長いつきあひは、そんな常識を許してられないのである。しかたがないので、かみ砕いて解説させられるのだが、これって一種のただ働きじゃないだろうか……。

まあ、おかげで退屈はせずです。でも、おすらと社会学者としての専門も流儀もちがい、「先生はどなたですか」ときかれて答えるのが嫌かたります。結局、この辺があまりに魅力的で、先生にしたのだから、これも自己責任なのだろう。

というわけで、泰先生、長い間ありがとうございました。楽しかったです。

(国際社会/経済)